

ジーラスタ皮下注をお受けになる方へ

★治療スケジュール

症状や経過に合わせて治療スケジュールが変わることがあります。

お薬の名前	1日目	2~4日目(抗がん薬終了後24~72時間後)	次コースまで
注射抗がん薬治療		お休み	お休み
ジーラスタ皮下注 3.6mg (ペグフィルグラスチム)			

★起こりやすい副作用 これらの副作用が、すべての方に起こるわけではありません。

骨痛

胸、腰、骨盤の骨に“骨を内側から押し広げられるような痛み”が出ることがあります。これは、通常よりも骨髄で活発に好中球が作られるために起こると考えられています。痛みが強い場合には、痛み止め(NSAIDs)を使用することで症状の軽減が期待されます。

⇒担当の医師あるいは当院医療スタッフ(看護師、薬剤師)に相談してください。



発熱

G-CSF製剤の投与開始3日から1週間の間に37.5℃前後の熱が出ることがあります。G-CSF製剤による発熱が感染症によるものか確認することが大切ですので、熱が出たときには、夜間・休日であってもすぐに担当の医師あるいは当院医療スタッフ(看護師、薬剤師)に連絡してください。

★G-CSF製剤とは？

G-CSF製剤は好中球を増やすお薬です。

好中球減少症治療薬には、G-CSF製剤があります。G-CSFはもともと体の中にある物質で、骨髄などで好中球のもとになる細胞をさかんに増やすほか、好中球の働きを強める作用を持っています。

抗がん薬投与後に連日の投与を行うG-CSF製剤と、**抗がん薬投与後に1回投与する持続型G-CSF製剤**があります。



★好中球について

好中球は白血球の仲間です。好中球は病原菌と戦い、私たちの体を守っています。

好中球は、体の外から侵入してくるウイルスや細菌などと戦う細胞です。病原菌を見つけた好中球は、病原菌を取り込みます(貪食作用)。私たちの体は、病原菌が侵入してくると、いつもよりも好中球を増やして病原菌と戦い、外敵からの攻撃に対して防御する役割を果たします。



★好中球減少症とは？

好中球が少なくなる状態のことで、感染症にかかりやすくなります。

病原菌から体を守る好中球が少なくなると(好中球減少症)、病原菌からの攻撃に対応できず、肺炎などの感染症にかかりやすくなります。一般的には、抗がん薬の治療後に起こりやすいといわれています。

そのため、好中球減少症になったら、病原菌が体の中に侵入しないような注意や対策が必要になります。

★抗がん薬治療と好中球減少症

抗がん薬は好中球を作る骨髄の働きを止めてしまうことがあります。抗がん薬の投与から7~14日目にもっとも好中球が少なくなります。

抗がん薬はがん細胞が活発に増殖するのを止めるように働くお薬です。しかし、多くの抗がん薬は、同時に正常な細胞が増殖するのを止めてしまうため、さまざまな影響がみられます。

私たちの体には、特に抗がん薬の影響を受けやすい細胞があり、「骨髄中の造血細胞」はそのひとつです。骨髄は、好中球を含む血球成分を作り出す造血機能を持っていますが、抗がん薬によってその働きが止められてしまうため、抗がん薬治療中には体内の好中球が減ってしまう場合があります。

★発熱性好中球減少症とは？

好中球減少時の発熱性疾患を、「発熱性好中球減少症(Febrile Neutropenia: FN)」と呼びます。

発熱性好中球減少症は、37.5℃以上の体温であることと、好中球が血液1μLあたり500個未満、あるいは1,000個未満で48時間以内に500個未満に下がると予想される場合をさします。このような状態になると、重篤な感染症を引き起こす可能性もあるため、事前に予防することが大切です。

